2009.7.17

（第3種郵便物認可）

安心の番人 ③

――獣医師が足りない

研究、対策の司令塔に

インフルエンザ最前線

4月24日、国立感染症研究所インフルエンザウイルス研究センター（東京都）の白倉雅之研究員(36)が所内の連絡メールを開くと、「米疾病対策センターが国内で7人の豚インフルエンザ感染者を確認」との情報が書かれていた。「嫌な感じ」を抱えて帰宅した。

翌日午前8時、携帯電話が鳴った。上司から「メキシコで豚インフルエンザによる死者が多数出ている。すぐに来てくれ」。土曜で休日だったが、家を飛び出した。最初の仕事は米国からウイルス株を輸入する手続きの書類作り。約40年ぶりの新型インフルエンザ大流行の幕開けだった。

感染研は「感染症対策」の司令塔。職員の2割は獣医師だ。新興感染症の7割は動物由来で狂犬病など人にも動物にも感染する人獣共通感染症も多い。白倉さんは動物好きで大学は獣医学部を選んだ。大学4年の時、ウイルス研究を始めると、研究の面白さに目覚めた。同級生の多くがペット診療に進む中、研究者を目指した。

4月下旬以降、新型の診断法やワクチンの開発など、次々と舞い込む仕事を徹夜でこなした。「感染症の歴史は長いが人類は克服できていない。それも多くは動物からきている。だから、感染症対策で動物の知識を持つ人は不可欠なんです」

◆　◆

動物からの感染症で、最も恐れられているのが鳥インフルエンザだ。今の新型とは違い強毒性で、ヒトの間で感染する新型に変異すると、国内で最大64万人の死者が出ると試算されている。

宮崎県は毎年秋、約300人の職員にインフルエンザの予防接種を受けさせる。同県の家畜対策に携わる公務員獣医師の人数は、飼育する動物数に対して全国最低レベル。一方、ブロイラーの飼育羽数は全国トップで、鳥インフルエンザが発生すれば人手不足は明らか。このため、06年に作業手引を作り、発生時に県職員を動員する体制を整えた。

07年1月、宮崎県清武町で鳥インフルエンザが発生。県職員も加わり、発生農場の鶏の殺処分作業が実施された＝宮崎県提供

07年1月、同県中部の清武町にある養鶏場で鳥インフルエンザが発生した。宮崎家畜保健衛生所主幹だった後藤俊郎さん(54)＝現・都城家畜保健衛生所衛生課長＝は防護服に身を包み鶏舎に入った。とさかが黒く変色し、顔がはれた鶏がバタバタと倒れていた。「初めて見る異様な光景だった」と振り返る。

発生農場では、すべての鶏を殺処分する。獣医師が各作業班の班長となり、鶏に初めて触れる応援者たちを指導した。密閉性の高いマスクをして鶏を追い回す作業は疲れやすい。だが、獣医師は各班1人しか配置できないため、休憩をとれず倒れることもあった。

「動員なしでは鳥インフルエンザには立ち向かえない」と後藤さん。職場を見渡すと獣医師の平均年齢は50歳近い。このまま補充がなければ、2年前のような体制を維持するには、やめねばならない業務が出てくるのではないか――。後藤さんの脳裏をそんな不安がよぎる。

＝つづく